B 144　服装史からみた『健寿御前日記』

三島学園女短大　　斎藤輝子

『健寿御前日記』は、12世紀後半の平安末期から鎌倉初期にかけて記された日記である。筆者は、健寿御前または建春門院中納言とよばれた女性で、父は歌人として有名な藤原俊成であり、五才年下の弟に藤原定家がいた。この日記は、筆者が、後白河法皇の女御で高倉天皇の生母の建春門院にお仕えした時と、建春門院の没後、後鳥羽天皇の才三皇女八條院にお仕えした時の約40年間の宮仕生活を記したものである。

この日記を服装史からみると、平安・鎌倉時代にしるされた数多くの日記のうち、衣服に関する記事の多いこと、又内容の豊富であること、内容の正確であることなどは、他の日記に例を見ない。

健寿御前の生きた平安末期から鎌倉初期にかけての時期は、いうまでもなく、あらゆる生活の領域において、平安時代の公家により作られてきた伝統的生活様式が質的転換をとげた時期であった。服飾の上でも、平安以来の伝統的様式が、時代の波をうけて新しいものへと変化した。形式を重んじた典麗優雅な、それ故に非活動的な公家装束は、実用的で活動的な服装へと変化しはじめた。衣及び袴が省かれはじめたのもこの時期である。また肌着として発生した小袖も、衣が省かれはじめたことによって表層化し、その布地、着装法にも変化がみられるようになった。このほか、衣・袴の衰退にともなって、新たな服飾、薄衣の出現をみるようになったのもこの時期である。私はこの本日記により平安末期から鎌倉初期にかけての宮廷の女房の衣生活の伝統的様式を受けついだ華麗さを知る一面、公家装束の伝統的様式が、古いものから新しいものへと変化する様相をしりえたのである。